

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

(MS Word)

【氏名】 森山 拓也

【所属】 (助成決定時) 同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科 博士後期課程

【研究題目】 トルコにおける反原発運動の特徴と課題

## 【研究の目的】 (400字程度)

本研究は、トルコにおける反原発運動の歴史的展開や特徴を明らかにすることを目的に開始された。トルコを事例に、エネルギー転換に向けた市民の希求や課題を明らかにすることも本研究の目的であった。

西欧先進諸国ではチェルノブイリ原発事故後に高まった市民運動が、原発からの脱却や依存度低減、将来世代を意識したエネルギー源への転換の流れを形成した。近年では台湾や韓国でも、福島原発事故をきっかけに高揚した市民運動の後押しで脱原発の方向性が決定された。そしてトルコを含め原発導入を目指す新興諸国でも、市民の間では原発に反対し、より先進的なエネルギー源の選択を求める声が高まりつつある。衰退する原子力産業がその生き残りをかけて原発輸出攻勢をかける新興国や途上国において、市民がどう反応し、どのような運動を繰り広げているのかを明らかにしたい。

トルコの反原発運動は、アックユが原発建設地に選ばれた1976年に始まり、1980年クーデターによる中断を経て現在まで続いている。トルコの人々は、なぜ原発に反対するのだろうか。反原発運動は誰によって担われ、どのような戦略を用いているのだろうか。本研究ではこうした問いについて、社会運動研究の方法を用いて検証した。

## 【研究の内容・方法】 (800字程度)

トルコにおける原子力をテーマとする社会科学分野の研究の多くは、エネルギー政策や安全保障政策に着目し、政策研究や国際関係論のアプローチで行われてきた。一方で、原発に反対する人々の営みに注目した研究は十分に行われてこなかった。本研究では社会運動研究のアプローチを用い、原発に反対する人々の運動に焦点を当てることとした。社会運動研究はアプローチの違いにより細分化されてきたが、現在では政治的機会構造論とフレーム分析、新しい社会運動論、資源動員論などを相互補完的に融合する方向で研究が進展している。本研究でもトルコの反原発運動の特徴を明らかにするため、社会運動研究の諸理論を総合的に用いた。なかでも運動組織や運動参加者のフレーミング戦略や、フレームの基礎となる集合的記憶や集合的アイデンティティといった文化的要素に焦点を当て、トルコの反原発運動の祝祭性やメッセージの創造性といった特徴を探った。

分析に用いたのは、反原発運動参加者への聞き取り調査から得られたデータ、イベントへの参与観察から得られたデータ、運動団体が作成した冊子などの出版物や、イベントの告知やキャンペーンのためのチラシやポスターといった一次資料、新聞記事などの二次資料である。特に、集会スピーチ、デモのプラカードや横断幕、ポスターなどにおける表現に注目した。助成期間中の2019年4月にはトルコでの現地調査を実施した。具体的には、イスタンブール、メルスィン、アンカラで活動家や専門家への聞き取り調査を実施したほか、トルコの反原発運動発祥の地であるタシュジュで資料を収集した。また、チェルノブイリ原発事故の発生日に合わせ開催されたイスタンブールでのシンポジウムとコンサート、シノップでの反原発集会に参加し取材を行った。

より発展的な取り組みとして、助成者がトルコの反原発運動を取材して制作したドキュメンタリー映画作品が招待され、International Uranium Film Festival (2018年10月、於ベルリン)に参加した。本映画祭における核兵器や原発、原子力産業全般に関する世界各地の作品の鑑賞や制作者らとの交流を通じ、他の地域

における核をめぐる課題や市民の取り組みについても理解を深めることができた。トルコの事例を世界的な動きの中に位置付けることは今後の課題である。

#### 【結論・考察】（４００字程度）

本研究では以下の点を明らかにした。

- ① トルコでは原発に反対する団体や個人の連合体である反核プラットフォームが運動の中心になることで、多様な市民社会組織や個人が原発への反対という最大公約数的スローガンの下で統一戦線を形成している。同時に、その運動は既存の市民社会組織による人員、資金、専門的知識、ネットワークなどの資源の動員に支えられている。芸術家たちの運動参加が、運動の祝祭性やレパトリの創造性を醸成していることも注目に値する。
- ② トルコでは、チェルノブイリ原発事故による被害経験や、当時のトルコ政府の対応や政治家の発言に対する不信感、さらに放射性物質のずさんな管理によって国内で発生した被ばく事故が集合的記憶として共有されている。反原発運動はそうした記憶を取り上げながら、人間の健康に悪影響を与え、故郷を奪う脅威として原発事故の危険性や、原発についての政府の説明は信用できないことを訴えている。
- ③ 反原発運動は自らを「自由と民主主義を求める運動」として位置づけている。運動が効果的な動員のために行うフレーミングは、運動参加者の自己認識にも作用し、集合的アイデンティティを形成する。反原発運動が用いてきたフレームは、「自然環境や暮らし、国の独立、自由と民主主義のために闘う我々」という集合的アイデンティティを形成している。なかでも「自由と民主主義」というフレームはマスターフレームとして作用し、選挙など制度内政治では掬い取られることのない要求や、政権への不満の受け皿となっている。
- ④ 以上から、トルコの反原発運動は、原発の建設阻止というシングルイシューの運動ではなく、トルコの民主化を求める運動であると言える。権威主義の下で市民の自由が抑圧されるなか、反原発運動は祝祭性を通じてトルコの市民社会に明るさや希望を与える運動でもあると助成者は考える。

研究成果の一部は『平和研究』52号で論文として刊行した他、国際学会 The Inaugural Congress of East Asian Sociological Association（19年3月、於東京）にて発表した。研究成果は同志社大学での博士論文としても執筆中である。